

Ⅲ 教学組織

看護学部看護学科

収容定員に対する在籍者数

(2009.4現在)

学 年	収容定員	現 員 数	休学者数 (内数)	留年者数 (内数)
1 年	60	86	0	1
2 年	80	96	0	1
3 年	80	90	0	0
4 年	80	91	1	0
計	300	363 (121.0%)	1 (0.3%)	2 (0.6%)

募集人員と入学者数

《 》…男子内数

	学部一般	推 薦 (帰国子女を含む)	学士編入学	科目等履修生
募集要項配布期間	2009年8月～ 2010年1月	2009年7月～11月	2009年7月～9月	2010年2月～ 2010年3月
願書受付期間	2009年12月21日～ 2010年1月16日	2009年10月19日 ～10月26日	2009年9月4日 ～9月11日	2010年2月24日～ 3月3日
募 集 人 員	60 (推薦15名程度を含む)	15程度	20	各科目若干名
志願者数(倍率)	432 (7.2倍) 《20》	56 (3.7倍) 《3》	73 (3.7倍) 《5》	3
受 験 者 数	407 (6.7倍) 《18》	56 (3.7倍) 《3》	69 (3.5倍) 《5》	3
合 格 者 数	1次試験 182名《7》 2次試験 107名《3》	16 《0》	20 《1》	2
補 欠 者 数	30		3《0》	
入 学 者 数	69《2》	16《0》	20《1》	2

卒業生

	学部一般	編入生
卒業生数	69	21
入学時人数	70	22
上級から加わる	4	1
下級から下がる	3	2
退学	2	0

平均修得単位数（学士編入生を除く）

		卒業所要 単位数	平均取得 単位数	最高取得 単位数	最低取得 単位数
教養科目	教 養 科 目		25	60	16
	外 国 後 科 目	10	10	14	10
	小 計	28	35	73	28
基 礎 科 目	31	32	32	32	
専 門 科 目	69	72	78	69	
総 計	128	140	183	129	

国家試験結果

	受験者 (名)	合格者 (名)	合格率 (%)
保健師	89	80	89.9
看護師	90	89	98.9

学部選択科目履修状況

		授業科目	学年	人数	
基礎科目	人間と文化	キリスト教倫理	1年	2	
		音楽	1・2年	17	
		美術	1・2年	31	
		文学	1・2年	50	
		哲学	1年	14	
		倫理学	2・3年	0	
		宗教学	2・3年	9	
	人間と社会	歴史学	1・2年	11	
		法学（日本国憲法）	1・2年	21	
		教育原理	1年	20	
		教育方法の研究	1年	17	
		社会学	1年	58	
		心理学	1年	36	
		教育制度論	2年	9	
		カウンセリング概論	2年	11	
		教職概論	2年	8	
		教育課程論	4年	14	
		道徳及び特別活動論	4年	13	
		生徒指導論	4年	13	
		女性学	2年	25	
		人間と環境	国語表現法	2年	2
			総合英語	1年	16
	英語Ⅲ-A		1年	8	
	英語Ⅲ-B		2年	13	
	文献講読A		2年	10	
	文献講読B		3年	3	
	英語表現法Ⅲ-S		2年	6	
	英語表現法Ⅲ-W		3年	7	
	異文化コミュニケー		3年	43	
	ドイツ語Ⅰ		1年	40	
	ドイツ語Ⅱ		2年	6	
	中国語		1・2年	12	
	人間と情報		情報科学	1・2年	13
		統計学演習	4年	5	
	自然環境	生物学	1年	30	
		物理学	1年	11	
化学		1年	6		

		授業科目	学年	人数
基礎科目	体育	体育Ⅰ	1年	56
		体育Ⅱ	1～4	34
	総合科目	総合科目Ⅱ（健康科学）	1・2	13
		総合科目Ⅲ（生活科学論）	1・2	34
		教職総合ゼミ	2年	10
専門科目	看護の基本	看護提供システムⅡ	4年	12
		看護技術論	4年	3
	人間の作用の保持・強化 と環境の相互	生涯発達看護論Ⅲ	4年	開講せず
		家族発達看護論Ⅱ	4年	13
		地域看護論Ⅲ	4年	9
		学校保健	3年	12
		養護概説	4年	16
	人間の相互作用の修正 と環境の相互	慢性期看護論Ⅲ	4年	2
		リハビリテーション看護論Ⅱ	4年	10
	人間の作用の回復・保護 と環境の相互	急性期看護論Ⅲ	4年	44
		看護学統合	看護研究Ⅱ	4年
	総合看護		4年	11
	看護ゼミナール（障害を持つ子どもと家族の看護）		4年	8
	看護ゼミナール（遺伝看護）		4年	2
	看護ゼミナール（看護教育）		4年	3
	看護ゼミナール（国際看護）		4年	12
	看護ゼミナール（生活行動が障害された患者とその家族の看護）		4年	14
	看護ゼミナール（老年看護）		4年	2
	看護ゼミナール（老年期の看護援助に関する文献学習）		4年	11
	看護ゼミナール（自校史）		4年	0
養護実習Ⅰ	4年		16	
養護実習Ⅱ	4年		16	

立教大学全学共通カリキュラム履修状況

授業科目	履修者数
対人関係の心理	4
リスクの政治経済学	1
自己理解・他者理解	1
多文化の世界	1

立教大学科目履修状況

	前期	後期
開講科目数	27	16
履修科目数	4	0
履修者数	6	0
単位習得率	85.70%	

【学部科目等履修生】

科目等履修生開講科目および履修者数

	授業科目	単位数	履修者数	単位修得者数	単位未履修者数
前期	心理学	2			
	生涯発達論Ⅱ	2	1	1	
	家族関係論	2	1	1	
	集団力動論	1	2	2	
	看護提供システムⅠ	2	1	1	
	看護技術論	1			
	生涯発達看護論Ⅰ	2			
	慢性期看護論Ⅰ	4	2	1	1
	慢性期看護論Ⅱ	3			
	看護研究Ⅰ	2	2	2	
	看護ゼミナール (生活行動が障害された患者とその家族への看護)	1	1	1	
	看護ゼミナール (遺伝看護)	1			
	看護ゼミナール (老年看護)	1	1	1	
看護ゼミナール (老年期の看護援助に関する文献学習)	1	2	2		
後期	ヒューマンセクシュアリティⅠ・Ⅱ	2	1	0	1
	地域看護論Ⅰ	2	3	2	1
	急性期看護論Ⅰ	3	2	2	
	看護政策論	2	4	3	1
	看護研究Ⅱ	3	1	1	
			計	20 (83.3%)	4 (16.7%)

【実習施設】

2009 年度実習施設一覧表

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
1	看護援助論Ⅳ	1	聖路加国際病院	30	臨地実習G	3	中野区中部 保健福祉センター
2	臨地実習A	2	聖路加国際病院	31	臨地実習G	3	中野区北部 健康福祉センター
3	臨地実習A	2	済生会横浜市東部病院	32	臨地実習G	3	中野区南部 保健福祉センター
4	臨地実習A	2	神奈川県立 こども医療センター	33	臨地実習G	3	中野区鷺宮 保健福祉センター
5	臨地実習B	2	聖路加国際病院	34	臨地実習G	3	港区みなと保健所
6	臨地実習B	2	東府中病院	35	臨地実習G	3	おもて参道 訪問看護ステーション
7	臨地実習C	2	聖路加国際病院	36	臨地実習G	3	浅草医師会立 訪問看護ステーション
8	臨地実習D	2	聖路加国際病院	37	臨地実習G	3	医師会立中央区 訪問看護ステーション
9	臨地実習E	2	永生会永生病院	38	臨地実習G	3	医師会立品川区 訪問看護ステーション
10	臨地実習E	2	救世軍ブース記念病院	39	臨地実習G	3	セコム駒込 訪問看護ステーション
11	臨地実習E	2	ブース記念老人保健施設 グレイス	40	臨地実習G	3	セコム高輪 訪問看護ステーション
12	臨地実習E	2	介護老人保健施設 リハポート明石	41	臨地実習G	3	セコム田園調布 訪問看護ステーション
13	臨地実習F	2	東京武蔵野病院	42	臨地実習G	3	セコム吉祥寺 訪問看護ステーション
14	臨地実習G	3	杉並区荻窪 保健センター	43	臨地実習G	3	セコム練馬 訪問看護ステーション
15	臨地実習G	3	杉並区高円寺 保健センター	44	臨地実習G	3	練馬区医師会立 訪問看護ステーション
16	臨地実習G	3	杉並区上井草 保健センター	45	臨地実習G	3	自由が丘 訪問看護ステーション
17	臨地実習G	3	豊島区池袋保健所	46	臨地実習G	3	白河訪問看護 ステーション
18	臨地実習G	3	練馬区北保健相談所	47	臨地実習G	3	綾瀬訪問看護 ステーション
19	臨地実習G	3	練馬区石神井 保健相談所	48	臨地実習G	3	板橋ロイヤル 訪問看護ステーション
20	臨地実習G	3	練馬区豊玉 健康相談所	49	臨地実習G	3	白十字訪問看護 ステーション
21	臨地実習G	3	練馬区光が丘 保健相談所	50	臨地実習G	3	あすか山訪問看護 ステーション
22	臨地実習G	3	足立区東和 保健総合センター	51	臨地実習G	3	訪問看護ステーション けせら
23	臨地実習G	3	足立区江北 保健総合センター	52	臨地実習G	3	訪問看護ステーションみけ
24	臨地実習G	3	千代田区 千代田保健所	53	臨地実習G	3	訪問看護ステーション けやき
25	臨地実習G	3	中央区日本橋 保健センター	54	臨地実習G	3	訪問看護ステーション さぎそう
26	臨地実習G	3	中央区中央区保健所	55	臨地実習G	3	城北訪問看護 ステーション
27	臨地実習G	3	中央区月島 保健センター	56	臨地実習G	3	東電さわやか訪問看護 ステーション中野
28	臨地実習G	3	江戸川区中央 健康サポートセンター	57	臨地実習G	3	訪問看護ステーション芦花
29	臨地実習G	3	江戸川区葛西 健康サポートセンター	58	臨地実習G	3	岩本町訪問看護 ステーション

	授業科目	単位数	施設名		授業科目	単位数	施設名
59	臨地実習G	3	新みさと訪問看護ステーション	68	総合実習	2	東芝ヒューマンアセットサービス(株)保健支援事業部
60	総合実習	2	聖路加国際病院	69	総合実習	2	小鹿野町保健福祉センター
61	総合実習	2	訪問看護ステーションパリアン	70	総合実習	2	NTT東日本首都圏健康管理センター
62	総合実習	2	東京武蔵野病院	71	総合実習	2	訪問看護ステーションあかし
63	総合実習	2	聖路加国際病院訪問看護ステーション	72	総合実習	2	助産婦石村
64	総合実習	2	共同作業所ひやしんす城北	73	総合実習	2	森田助産院
65	総合実習	2	多摩たんぽぽ介護サービスセンター	74	総合実習	2	かもめ助産院
66	総合実習	2	小竹メンタルサポート	75	総合実習	2	結核予防会結核研究所
67	総合実習	2	永生会永生病院				

Class of 2010 (2010年3月卒業) 総合看護・看護研究Ⅱタイトル一覧

番号	氏名	タイトル
1	芦田いずみ	看護師のスポーツ経験と職場適応についての一考察
2	荒居 康子	がんに対する積極的治療が有効でなくなった患者が病院から在宅ターミナルケアへ移行する際、それを妨げる医療者側の要因
3	新井 景子	カテーテル関連尿路感染予防のためのケアに関する文献検討
4	荒木 美帆	短期入院のために家族と離れることで不安を抱えている幼児期後期の子どもに対する支援
5	今井 敬子	青年期・成人期四国八十八箇所徒歩遍路経験による心理・行動変化
6	今関美喜子	胎児心臓スクリーニングを受けた妊婦・家族に関わった助産師のケアと問い
7	宇田川 愛	脳卒中回復期患者における「できるADL」と「しているADL」の差の要因の検討
8	江田 沙織	看護学生が臨地実習で感じる困難とその対処法および実習時期との関連性の検討
9	大槻 香織	更年期女性の日常生活における苦痛
10	奥村 紗代	在日外国人のストレス認知的評価と対処方略について
11	小黑 佳奈	NICU入院中の児とその母親が家庭での生活へスムーズに移行していくために必要な看護ケアの考察
12	小沢 朱理	保健室登校児童が教室登校する為に必要な養護教諭の行うケアのあり方について ～心的ケアを中心として～
13	小原 彩香	医療者が発信する先天異常に関するインターネット情報内容の現状
14	加藤かおり	精神疾患をもつ人の就労支援における現状と今後の課題 ～精神疾患をもつ人の『働きたい』という思いを支える～
15	上 知子	脳血管疾患による片麻痺を持ちながら生活している老年期患者の思いの変化
16	河原 志保	小児救急電話相談での看護師の役割
17	黒川 正興	入院治療における統合失調症患者に対する精神科クリニカル・パスの現状
18	小池 沙織	在日外国人のストレス認知的評価と対処方略について
19	小澤口晶子	胎児の道徳的地位に関する一考察 ～いつから“人”であるのか～
20	小杉 陽美	心肺蘇生中の患者の家族の立ち会いの有効性と医療スタッフの認識に関する検討
21	小林菜津季	月経前症候群 (PMS) の研究の現状と看護ケアの文献的考察
22	小宮 志保	看護学校における性感染症教育の実践

番号	氏名	タイトル
24	三枝 真心	臨地実習における学生の困難に関する研究
25	葉山 麻衣	乳がん患者が子どもへ病気を伝える際に抱える悩みと、わが国における現時点での社会的資源の現状
26	佐々木祐香	今後の生活に対する希望と、それらの希望の家族への伝え方 ～高齢者クラブに所属している人を対象にして～
27	指田 恵利	精神科病院における社会的入院患者の退院阻害要因とその看護支援
28	佐藤かおり	ICU の人工呼吸患者における1日1回覚醒させる鎮静管理法の効果と合併症に関する文献検討
29	澤田 優香	AED 使用後の患者の予後についての文献検討
30	篠 朋江	終末期がん患者と家族のつながりを強化する看護援助についての考察 ～患者の手記からみる家族への思いの分析～
31	芝坂 綾乃	フィリピン・マニラ首都圏スラム住民が考える地域の問題
32	鈴木 彩加	アロマハンドマッサージを受けたことでもたらされる気持ちの様相
33	芹澤沙弥佳	フィリピン都市部貧困地域に在住する母親の母乳育児継続期間及び母乳育児に対する認識
34	高澤めぐみ	自主グループに所属し活動することにより得られるメンバーの生活の充実感とは
35	鷹取 由紀	足浴の効果と現状 一文献検討を通して一
36	高橋 千佳	うつ病で休職した企業労働者が復帰する職場環境に関する文献検討
37	高橋 雅実	中高生がケータイ小説に共感する要因とその性意識と性行動
38	武井 奏子	フィリピンスラム地区在住の子どもたちのう蝕に関する調査
39	谷本 加苗	災害看護学教育カリキュラム構築に関する研究
40	崔 賀英	A 県下における朝鮮学校の性教育のあり方 ～性教育システム構築までのプロセスの検討～
41	登坂 菜摘	広汎子宮全摘術後の排尿障害に対する効果的な看護援助についての検討
42	長澤 裕美	養護教諭の連携・コーディネーション能力として求められるもの ～生徒のメンタルヘルス解決に向けて～
43	中島絵梨子	入院中に学童期の子どもが他児から受ける心理的影響と看護援助
44	中野 和季	帰国子女の帰国後の困難度と不適応体験及びサポートについて
45	滑川 愛美	看護師が精神疾患を持つ患者へ傾聴を行うことによる患者と看護師への効果
46	花島 彩子	ICU に関連した心的外傷後ストレス障害／心的外傷性ストレス症状 ～発症率とリスクファクター～
47	林 保江	過疎のまちで生きていくということ
48	福田 晴香	臨地実習の学生に対して病棟看護師が考える教育的関わりについての変化
49	藤田 志穂	異文化を持つ対象へ出生前診断に関する情報提供を行う際に用いるパンフレットの作成
50	二村真由美	看護師が考える入院患者の入浴の意義
51	真家 亜純	非言語的コミュニケーションにおける話しやすい看護師についての検討
52	嶺井 祐子	外来がん化学療法を受ける患者の抱える問題に対する看護師の捉え方と看護の現状
53	村田 千穂	在宅ターミナルケアにおける訪問看護師の看取り後の充実感
54	毛利 亜美	入浴に拒否的な認知症高齢者の『その人らしさ』への取り組み ～介護老人保健施設の個浴に着眼して～
55	森下 茉実	ターミナル期がん患者の排泄援助から、その人らしさを支える看護
56	山口ちあき	乳がん・自己検診を身近なものにするために ～20代後半女性のインタビューから考える～
57	山田 由美	在日コリアン二世が持つアイデンティティと日本で余生を送る意識
58	山野辺恵子	ダウン症児の保護者の困難と看護職に望むこと

番号	氏名	タイトル
59	横本 悠希	大学新卒看護師の職場適応について ～就職2年目看護師の振り返りを通して～
60	吉江茉莉子	周産期における妊娠先行型結婚女性への援助の在り方 ～文献検討からの一考察～
61	吉野 靖代	集中治療室における口腔ケアは人工呼吸器関連肺炎予防に有効か
62	吉村 明恵	災害看護学教育カリキュラム構築に関する研究
63	若松 香織	外国人留学生の新型インフルエンザ(H1N1) に対する知識と行動
64	渡部 綾香	周産期喪失を経験した母親が子どもとの思い出作りをすることの意味
65	渡邊 典子	働く母親への母乳育児支援における今後の課題 ～経験者の語りから～
66	進藤千保子	精神科慢性期病棟における肯定的フィードバックの有用性について
67	成田 理紗	境界性人格障害を持つ人の家族や周囲の人々の抱える心理と、彼らに対する援助について
68	播 奈波	日本の歩むべき学校性教育の方向性 ～過去5年間の文献からの考察～
69	山田さゆり	非言語的コミュニケーションにおける話しやすい看護師についての検討
70	阿部舞由子	東北地方の2県における新卒看護師の確保定着のための取り組みについての比較
71	有泉 香里	わが国のハンセン病患者に対する看護 ～看護倫理の視点から～
72	岡田 繭美	看護学生の職場選択に影響を及ぼす病院ホームページとパンフレットの在り方に関する検討
73	小原 希	世代間交流の特徴とスタッフの多世代交流支援についての考察 ～4つの施設・プログラムの見学から～
74	貝塚 智子	A看護大学生が看護職を志望した際に周囲から受けた意見にみられる看護職のイメージについて
75	粕田 悦子	精神科における身体拘束に関する看護の近年の研究動向と課題
76	小塩 佳奈	Web 2.0型Q&Aサイトにおけるドメスティックバイオレンスに関連した投稿内容とサポート機能
77	鈴木 結	妊娠・分娩・産褥期における東洋医学療法に関連するCAM研究の現状と課題 ～看護職の行った研究に焦点をあてて～
78	武居英里子	糖尿病運動療法へのトランスセオレティカルモデル導入による運動継続性に関する文献的考察
79	寺嶋 明子	看護師を通して語られた生殖補助技術(Assisted Reproductive Technology) のリスクとケア
80	長瀬 明英	躁状態にて入院した双極性障害患者に対する看護支援
81	成瀬 真紀	延命治療の中止を取り巻く問題への一考察 ～尊厳ある死を迎えるために～
82	林 儀一	看護大学2年次生が基礎看護実習において看護課程をどう理解しているかの実態調査
83	原田 契子	看護大学生におけるデートDVに対する意識・実態調査
84	野田 優子	看護学生の職場選択に影響を及ぼす病院ホームページとパンフレットの在り方に関する検討
85	細金 智衣	入院患者の待ちの時間に対する思いと看護師に求められる対応
86	松枝 智子	医療者に対するターナー症候群の理解に向けた教育案の作成 ～ターナー女性への支援について焦点をあてて～
87	松田 豪	フィリピン・マニラのスラム地区における結核患者のDOTS治療完了への意欲について
88	山本 聡美	看護学生の職場選択に影響を及ぼす病院ホームページとパンフレットの在り方に関する検討
89	渡辺真紀子	看護師が政治への関心を高めるための方策について
90	桐原 絵理	急性期脳神経系疾患患者の“起きる”看護ケアプログラム導入に対する検討 ～患者と家族の受け入れに焦点をあてて～

入試委員会

1. 構成員

- ＜委員長＞小松浩子
＜委員＞井部俊子、菱沼典子、麻原きよみ、
堀内成子、柳井晴夫、
＜書記＞教務部 櫛田智恵美

2. 役割・職務

- (1) 聖路加看護大学入試委員会規程により看護学部入学者選抜の実施に関する事項を審議し公正な方法で実施運営を図る。
- (2) 審議事項は、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）、入学者選抜方法その情報提供および情報開示、各委員（出題、校正、面接、採点）の人選、入学者選抜の統計、その他入学者選抜に関すること。重要事項は教授会の議を経て決定する。

3. 活動内容

- (1) 委員会は常設で定例会は原則毎月1回開催した。文部科学省の通達により一般入学試験における新型インフルエンザ対策を講じるため臨時委員会を開催し、委員以外の山口喜義事務局長、進藤務事務部課長、健康管理中山久子保健師、高橋昌子教務課長も交えて検討を行った。受験生への2010年度一般入学試験における新型インフルエンザの対応については本学ホームページにて周知した。
- (2) 公募推薦（帰国子女を含む）入試の名称および出願資格を変更し、2010年度推薦（帰国子女を含む）入学試験から実施した。出願資格は従前より幅を広げ高等学校もしくは中等教育学校の卒業見込みから卒業して5年未満で高等学校の学業成績が全体の評定平均値4.1以上の者とした。帰国子女はその特性から変更せず2009年度内の卒業または卒業見込みの者とした。
- (3) 入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）について、2009年度聖路加看護大学重点活動計画のミッションおよびビジョンを基に検討を行い決定した。2010年度各入学試験（学士編入学、推薦＜帰国子女を含む＞、一般）の募集要項および一般入学試験要項に掲載して受験生へ周知

した。

- (4) 小論文の採点基準を作成し、2010年度学士編入学試験で試行した後、若干の修正を加えて2010年度一般入学試験で使用した。採点基準が明確となり採点者から評価を得た。
- (5) 2010年度学士編入学試験の情報開示について検討を行い2009年度内に周知と開示を行った。
- (6) 2010年度一般入試「国語」における出題ミスについての公表を行った。また、学内の討議を経て入試ミス再発防止策を作成し文部科学省へ届け出た。
- (7) 2010年度一般入学試験合格発表は従来のテレホンサービスを廃止し、携帯電話 Web 画面による合格発表を導入した。トラブル等は一切発生せず。

4. 課題

- (1) 出題ミス防止策の関係者への周知と徹底
- (2) 入試マニュアル（特に採点入力）の作成
- (3) 学士編入学試験における情報開示の周知
- (4) 教務部長と入試委員長の役割と責任の明確化について

カリキュラム運用委員会

1. 構成員

- ＜委員長＞麻原きよみ
＜委員＞伊藤和弘、菱田治子、菊田文夫、廣瀬清人、鶴若麻里、中山和弘（サバティカル・リーグのため9月～1月は欠席）、菱沼典子、田代順子、及川郁子（サバティカル・リーグのため9月～1月は欠席、欠席期間は平林准教授または小野准教授が出席）、小松浩子、外崎明子（2009年12月まで）、亀井智子、堀内成子、松谷美和子、井部俊子、萱間真美、大坂和可子（2010年1月より）
＜書記＞教務部 高橋昌子

2. 役割・職務（カリキュラム運用委員会規程）

本学の教育理念のもと、現行の看護学部教育課程の運用および編成に係る事項について所用の審議を行い、必要あれば教授会に上程する。具体的には、

以下のことを審議する。

- (1) 教育課程の編成に関すること
- (2) 授業科目および実習の実施に関すること
- (3) 時間割の編成に関すること
- (4) 前各号に係る評価に関すること
- (5) 単位の認定に関すること
- (6) 非常勤講師、臨時助教の採用に関すること
- (7) 学生の履修状況に関すること
- (8) その他教育課程に関すること

3. 活動内容

11回の委員会を開催し、例年の上記審議事項の他に、以下について審議を行った。

- (1) 学部における保健師国家試験受験資格の選択性を決定した。
- (2) 授業や実習における新型インフルエンザの対応について検討した。
- (3) 実習中の交通機関の不通による休講措置についての便覧掲載を検討した。
- (4) 学部の総合実習での臨床教員の採用を決定した。
- (5) 立教大学全学共通カリキュラムの全学年、全曜日の履修を可能とした。
- (6) カリキュラム2011についての意見交換を行った。

4. 課題

- (1) 保健師国家試験受験資格を選択性とすることを決定したが、具体的にどのように選択させるか、何時の時点で行うか等、検討中となっている。
- (2) 養護実習の実施時期について、6月中旬から7月中旬では受け入れが難しいため、実施時期を検討する必要がある。
- (3) 「情報科学」「生涯発達看護論Ⅲ」の2010年度の担当者が決まらず、「開講せず」となった。「生涯発達看護論Ⅲ」は2005年度から「開講せず」が続いている状況である。
- (4) 卒業生が養護二種免許状を一種免許状にすることができるための科目等履修の方法等を検討していく必要がある。
- (5) カリキュラム2011を完成し、2010年7月に東京都を通じて文部科学省に申請できるよう検討および審議を進めていく必要がある。

●カリキュラム 2011

1 構成員

＜委員＞麻原きよみ、松谷美和子、有森直子、飯岡由紀子、大森純子、小野智美、梶井文子、佐居由美、瀬戸屋希、廣瀬清人

2 役割・職務

2011年度から開始するカリキュラムを作成する。

3 活動内容

11回の定例会議および6回の臨時会議を開催し、カリキュラム作成のための検討を行った。また、全教員対象にカリキュラム2011の進捗報告および新カリキュラムの共通理解のためのディスカッションを1回行った。

4 課題

- (1) 2010年5月の理事会に諮るための授業科目単位数の確定、および7月に東京都を通して文科省に申請するためのカリキュラムを完成する必要がある。
- (2) 全教員と検討内容を共有しながら進めていく必要がある。

●実習単位認定者連絡会

1 構成員

＜担当者＞佐居由美、平林優子、永森久美子、有森直子（永森助教産休のため）、飯岡由紀子、市川和可子、梶井文子、瀬戸屋希、小林真朝

2 役割・職務

レベルⅠ、Ⅱの実習単位認定者による学生の指導に関する会議

3 活動内容

定例会議5回、臨時会議2回、計7回の会議を開催し、学生の実習指導および指導体制の整備について検討を行った。

- (1) 実習担当教員と健康管理室との連携体制について検討した。
- (2) レベルⅠⅡⅢの実習を通じた、体系的な実習指導のための指導教材について検討した。

- (3) 実習オリエンテーションの方法および内容について検討した。
- (4) 実習前の事前アンケートの導入について検討し、7月に実施した。
- (5) その他、実習上の検討課題について話し合いを行った。

4 課題

レベルⅠⅡⅢの実習を通して、学生が自身の学びを確認できる評価方法について検討していく必要がある。

●臨地実習Ⅱ担当者会議

1 構成員

<担当者>レベルⅡの実習担当者全員

2 役割・職務

レベルⅡの実習運営のための検討会議

3 活動内容

4月および6月に2回の会議を開催し、臨地実習に向けた準備と実習指導体制についての検討を行った。

- (1) 臨地実習オリエンテーション、技術確認および学生の事前自己学習の内容について検討した。
- (2) 今年度より、事前に学生および指導教員を対象とした電子チャート(SMILEⅢ)オリエンテーションを実施した。
- (3) 実習前の事前アンケートの実施方法について検討し、7月に実施した。

4 課題

- (1) レベルⅠⅡⅢの実習を通して、学生が自身の学びを確認できる評価方法について検討していく必要がある。

●実習ミーティング

1 構成員

<委員>看護系教員全員

2 役割・職務

レベルⅠⅡⅢの実習科目の運用と検討と生じる問題への対処を検討する。

3 活動内容

2009年7月と10月の2回開催した。7月は終了した総合実習について、各専門領域の実習内容と学生の状況について報告した。10月は、臨地実習を報告し、災害時等の実習中止の判断等について、また学生の学習状況について意見交換を行った。

4 課題

2回の開催でどの内容を検討するのか明確ではなく、実習期間中であったために欠席者が多かった。実習ミーティングの開催回数、時期、検討内容を含めて見直しが必要である。

実習室委員会

1. 構成員

<委員長>平林優子

<委員>四本竜一、島田裕司、佐竹澄子(～12月)、大隅香(～10月)

2. 役割・職務

聖路加看護大学の学生が必要な看護技術を修得するために実習室の環境を整える。

- (1) 地下および6階実習室と教材が、学生の学習環境として整うように管理・運営する。
- (2) 実習室自己学習支援員を配置し、学生の自己学習支援を行えるように依頼・調整する。

3. 活動内容(表1・2参照)

4. 課題

- (1) 実習室の使用予定が過密なため以下のような問題が生じている。①学生の自己学習時間の確保が困難、②各教科目の使用時間、準備時間、物品調整などの困難や煩雑さ。

この問題は、現状を明確にし、大学全体で調整が必要である。

- (2) 継続勤務が可能な自己学習支援員の確保。自己学習支援のため必須である。
- (3) 学生、教員の実習室の設備、物品使用に関するマナー向上。継続して呼びかける予定。

表1 2009年度実習室委員会活動内容

活動項目	活動内容
実習室支援員の確保・支援業務依頼・日程調整・勤務管理・学内周知	原則週2回(火・木)の13-19時に1名の支援員が支援活動ができるように調整した(2009年度は計3名雇用)。掲示とメールで学内に周知
地下、6階の実習室インベントリー	3月11日(木)10時~15時、教員、学生アルバイト、自己学習支援員の計49名で実施。不要物品の整理、アーカイブへの移行などを含める。
医療機器・教材の点検	①臨床工学士による医療機器の点検を依頼(7月、3月)、②蘇生・シミュレーター人形の点検を業者に依頼(2月)、③通電・充電・作動点検を毎月確認
物品の修理・破損物の処理	年間を通じて実習室物品・教材の修理や破損物処理の窓口となる。
物品の貸し出し・実習室使用の調整	貸し出し物品の相談、準備、貸出票(教務課保管)による管理を実施。文化祭や病院の研修等の調整も実施した。
業者による清掃依頼・インベントリー時の棚・物品の清掃	業者への清掃依頼(8月、2月)(倉庫内ワックスがけ、ベッド、床頭台、棚扉や枠等)。インベントリー時(3月)に全棚内・教材物品類の清掃
全ベッドのリネンの洗濯・交換	8月、3月に実施
実習室必要物品の購入・予算計上	各領域からの要望を聴取して予算計上。今年度購入で高額のものとしては、電動ベッド(病院と同機種)、各種モデル人形・自走式車椅子等
実習室環境整備	①6階実習室に4台のベッドを配置し、1箇所はベッド周囲にカーテンを設置、②実習室のゴミ分別方法を検討し、種類別ゴミ箱設置、③ベッドプレートの変更、④日々の環境整備、⑤設備修繕上の連絡調整
実習室使用に関するアナウンス	①自己学習室マップの作成とアナウンス、②実習室使用上のマナーの呼びかけ(掲示・メール)、③実習室に関連する情報のアナウンス

表2 2009年度実習室自己学習支援員による自己学習支援件数 (延べ人数)

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
1年生	0	0	0	0	0	0	28	29	73	130	4	0	264
2年生	0	118	529	192	35	0	29	42	24	19	2	0	990
3年生	0	0	0	0	0	134	27	2	4	4	0	0	171
4年生	0	0	4	4	0	0	0	0	0	0	1	0	9
大学院	0	0	22	0	0	0	0	16	9	0	0	0	47
													1481

養護教諭一種検討会

1. 構成員

及川郁子(前半委員長、後半サバティカル・リーブ)、菊田文夫(後半委員長)、麻原きよみ、伊藤和弘、廣瀬清人、留目宏美、岩辺京子(非常勤講師)、森川雪絵(教務)

2. 役割

養護教諭一種検討会は、2006年度より開講した養護教諭一種取得の養成カリキュラムに関する履修内容や方法について検討するとともに、運用の過程

で生じる問題を検討するための委員会である。

3. 活動内容

1) 科目履修に関するオリエンテーション

新学期1年生から4年生に、必要な履修科目の選択、養護実習に向けた準備などのガイダンスを実施した。また、必要に応じて履修に関する情報提供の機会を設けるようにした。

2) 実習校の決定

3年生の養護実習履修希望者11名について、実習校の依頼を行い、8名が履修者の出身校や都内私立校に、3名が東京都公立校での実習が

決まった。

3) 養護実習に向けての事前学習

4年生の養護実習に向け、「学校におけるけがや病気の対応」「保健教育の実際」についてロールプレーなどを交えながら、1日の事前学習を実施した。

4) 養護実習について

4年生の養護実習履修者は15名であった。実習校は、東京都23区内7名、都下1名、千葉県・神奈川県各2名、茨城県・福島県・静岡県が各1名であった。学生の担当教員を決め、事前打ち合わせから実習評価までの一連を担当教員が責任をもって実施するようにした。また、適宜委員会等を利用して、実習がスムーズに進むよう教員間の調整を図った。

初年度であったが、実習目標の到達度については、実習校の養護教諭の評価も含め、ほぼ達成できていた。

5) その他の活動として、学士編入生の教職免許申請に関する科目内容の検討、日本養護教諭養成協議会2009年度総会への出席、教職総合ゼミの科目内容の変更に伴う文部科学省への書類提出、教員免許状の申請に関わる手続きの実施、等を行った。

6) 履修学生からの意見と対応

養護教諭一種カリキュラムを履修した4年生から、次年度に向けた改善要望事項が学長に提出された。内容としては、教職関連科目間の連携に関する事、教職総合ゼミの開講時期、養護実習の時期、専任教員の配置の要望などであった。学長からの要請を受け本委員会において、これらの内容を検討し、学長への答申を行った。

4. 今後

1年次から4年次までの養護教諭一種取得に向けた養成カリキュラムの運用を終えて、改善事項や改善に向けた方策を明らかにすることができた。また、本学卒業生を対象とした科目等履修に関する方針も決定し、2010年度から一部関連科目を開講することになった。当初より希望していた専任教員の配置も決まり、本委員会の役割は終了したものとし、学事協議会に諮り2009年度をもって委員会は解散することとなった。

体育デー委員会

1. 構成員

<委員長>藤田祥子(3年生)

<副委員長>白土聡美(3年生)

<委員>4年生:花島彩子、二村真由美

学士11:有泉香里、武居英里子

学士12:岩下ひとみ、横山仁美

2年生:榊原あゆみ、添田 桜

学士13:揚村雄介、都合により削除

1年生:佐藤さやか、細川舞子

<顧問>大濱あつ子(特別顧問)、小口江美子、

大坂和可子、進藤 務

2. 役割

体育デーの企画・運営(本委員会は学生委員が主体的に企画・運営を行う。教職員顧問は企画・運営のサポートを中心に行っている。)

3. 体育デーの目的(学生作成の2009体育デーのしおりより)

- 1) 他の学年の人たちや先生方との親睦を深める。
- 2) 身体を動かし、気持ちの良い汗を流す。
- 3) 参加者の皆さんが思いきり楽しむ。

4. 活動内容

新入生委員勧誘を行いメンバーが揃った後、体育デーまでの期間の昼休み時間を利用し週1~3回、学生の自主的な話し合いのもと体育デーの企画を行った。主な準備内容として、役割分担・種目決め・ルール決め・必要物品の準備に加え、各チームの参加者出場種目の決定・体育デーのしおりの作成と参加者への配布(学生全員、参加教職員)などを行った。

2009年度の体育デーは、6月5日(金)中央区総合体育館にて開催された。競技種目は、バレーボール・ドッチボール・ポートボール・台風の目・玉入れ・障害物競走・綱引き・チーム対抗リレーを行った。競技の結果は、1位:赤チーム(4年、学士11回生)、2位:青チーム(1年・大学院生)、3位:黄チーム(2年・学士13回)、4位:白チーム(3年・学士12回生)であった。

体育デー当日は、あらかじめサポーターとして募

集した学生とともに各種目の審判の実施、司会進行などを実施した。教職員顧問は適宜ミーティングに参加し、学生の自主的な活動へのアドバイスや援助、教職員の出場種目の調整等を行った。

佐居由美、卯野木健（以上、聖路加看護大学）

5. 課題

- (1) 体育デーのしおりの配布範囲と配布方法についてあらかじめ委員会で確認を行い配布もれないようにすること。
- (2) 非常勤教員への連絡が遅くならないよう配慮すること。
- (3) 年度が変わり役割変更する際は学生間の引き継ぎを綿密に行うこと。

実習のあり方検討会

1. 構成員

- <委員長>松谷美和子、
 <委員>佐藤エキ子、高屋尚子、飯田正子、寺田麻子、西野理英（以上、聖路加国際病院）、井部俊子、平林優子、大隅香、

2. 役割・職務

本検討会では、看護基礎教育における実習のより良いあり方を、臨床現場と教育現場の協働により再検討することを目的としている。

3. 活動内容

2009年度は、検討会を11回実施した。検討会ではこれまでの成果や実習上の課題等を踏まえ、教育と臨床との連携の方法を探りながら、新カリキュラムへの具体的提案事項について検討した（表3参照）。また、2009年度本学卒業生を対象に看護実践能力調査を実施した（研究倫理審査委員会承認番号：09-1005）。活動成果の公表（表4参照）を行った。

4. 課題

看護基礎教育内容に臨床現場の状況を反映させるため、臨床現場と教育現場の協働のあり様を引き続き検討する必要がある。

表3 新カリキュラム（カリキュラム2011）への提案内容

提案事項	具体的内容
新科目の提案	科目名：看護ゼミ 総合臨床演習（仮称） 開講時期：4年後期（選択） 単位数：演習1単位（30時間） 内容：昨年度まで実施していた「臨床看護師のリアリティショックを軽減するための演習」時に作成した演習状況（シナリオ）を活用する。演習内容は、状況を判断しながら、基本的看護技術を実施する内容である。 ※科目運営は大学の教員と臨床教員の協働で行う。シナリオ内容に、臨床状況を随時反映させる。
シミュレーション演習の各科目への提案	各看護領域の演習や学習に今まで以上に状況設定演習を活用する提案をすることとなり、シミュレーションを活用した演習を提案することにした。カリキュラム2011や各領域の会議で提案した。

表4 「実習のあり方検討会」2009年度成果公表一覧

執筆者	論文タイトル	掲載誌・頁
佐居由美（2009）、松谷美和子、平林優子、他8名	看護学生の卒直後と卒後3カ月の「臨床実践能力」の比較	日本看護学会論文集：看護管理（39号）、155-157
平林優子（2009）、松谷美和子、高屋尚子、他8名	新人看護師への移行演習プログラムの改善とその評価 —臨床の場を使っての演習と体験者の評価から	聖路加看護学会誌（13巻・2号）、63-70
佐居由美（2009）、松谷美和子、平林優子、他8名	A看護系大学卒業生19名の「看護実践能力」-卒業直後と就職3カ月後の比較-	聖路加看護学会誌（14巻・1号）、34-42

慶應義塾大学薬学部(旧共立薬科大学)との 学術交流委員会

1. 構成員

＜委員長＞亀井智子

＜委員＞小野智美、永森久美子、卯野木健、
細川恵子

2. 役割・職務

委員会規定はないが、「聖路加看護大学と慶應義塾大学との教育・研究上の連携・協力に関する協定書」(平成19年12月17日付)にもとづき、相互の学生の交流を推進し、可能な限りの便宜と機会を提供するために「保健・医療・福祉系学生交流合同セミナー」への共催を行ってきた。慶應義塾大学薬学部(旧共立薬科大学)による「社会的ニーズに対応した質の高い医療人養成推進プログラム」(医療人 GP)が2008年度に終了したが、その後も参加大学間の連携が継続し、本年度は首都大学東京が主催校を担い、慶應義塾大学薬学部、慶應義塾大学医学部、慶應義塾大学看護医療学部、聖路加看護大学、東京慈恵会医科大学、新潟医療福祉大学の共催により第4回保健医療福祉系学生交流合同セミナーを開催した。本委員会では、このセミナーの準備委員会への参加、およびセミナーの運営への協力を行うことを役割とした。

3. 活動内容(表5)

1) 準備委員会への参加

電子メールによる意見交換を随時行い、準備委員会(於:慶應義塾大学薬学部)へ参加し、共催大学の教員らと共に合同セミナーの目的、日時、メインテーマ、内容、ケーススタディに用いる事例、参加者募集方法、ポスターなどについて

討議した。メインテーマは、「高齢者を支える・・・これからの多職種連携」と決まった。

2) 合同セミナーの内容、および運営

保健医療福祉にわたる多様な専門領域の学生が共にグループワークを行いながら、学生自身が自己の専門性を認識し、職種間のコミュニケーション能力や視野を向上することをねらいとした1日のワークショップ形式による学際的な合同セミナーである。今年度はワールドカフェ方式によるグループワークを6ラウンド繰り返す方法を取り、高齢者医療福祉のイメージ、高齢者に対する各職種のアプローチ、現在の高齢者医療福祉が抱える問題点などのテーマに沿って、多職種学生がディスカッションを行い、本委員はグループワークのファシリテーターを担った。

3) 本学学生への周知方法と参加者数

本学学部学生には全員にパンフレットを直接配布し、案内を行った。大学院生には掲示板へのポスター掲示と院生ラウンジへのパンフレット配布を行った。合同セミナーの参加者学生数は63名(内訳;医学1、看護学12、薬学16、社会福祉学1、理学療法14、作業療法14、放射線学4、栄養学1)で、本学からの参加学生は2名であった。

4. 資料・データ

参加学生の満足度は90%以上が「大いに満足した・満足した」とし、「このセミナーは将来役立つと思うか」についても97%の参加学生は「役立つ」と回答した。自由記載からは「他職種の学生とのディスカッションが良い刺激で勉強になった」等があげられていた。

表5 委員会等の経過

日時	議題	参加者数	準備委員会
2009年6月8日(月)	第1回企画会議 テーマ、開催方法等の検討	11	江原吉博、飯島史朗、石川さと子(慶應義塾大学薬学部)、小池智子、茶園美香(慶應義塾大学看護医療学部)、中島里加(慶應義

2009年8月28日(金)	第2回企画会議 提示事例の検討、タイムスケジュール確認等	11	塾大学医学教育統括センター)、福島統(東京慈恵会医科大学)、木下正信・大嶋伸雄(首都大学東京健康福祉学学部)、亀井智子・永森久美子(聖路加看護大学)
2009年9月26日(土) 9時30分～ 17時30分	第4回保健医療福祉系学生交流合同セミナー「高齢者を支える・・これからの多職種連携ー保健・医療・福祉系多職種間のよりよいコラボレーションを求めて」	学生63 (内、本学は2名) 教員15	上記に加え、小野智美、卯野木健、細川恵子(聖路加看護大学)、重野豊隆(星薬科大学)、井手口直子(日本大学薬学部)、田野ルミ(埼玉県立大学)、勝木員子(了徳寺大学健康科学部)、繁田雅弘(首都大学東京)

学生支援推進プロジェクト

1. 本取組の概要

本学が位置する中央区築地・明石町地区は、祭礼や季節行事等の組織的な運営のため、地域住民の世代間交流が積極的に行われている。そこで、このプログラムでは、本学の学生ひとりひとりが看護専門職業人として、また、よき市民として、アイデンティティを確立できるように、地域教育力を活かした活動を地域住民に支援いただきながら企画実施し、学部学生全体の学士力向上と本学の GSH (Gross Students' Happiness； 学生総幸福) 向上を目指す。

2. 本年度の重点的取組

「汎用的技能」および「態度・志向性」の向上を達成するために、専門職業人に不可欠なコミュニケーションスキルの獲得や、近い将来、職場や家庭で担うべき役割を果たすために必要とされる社会的責任感・倫理観・自己管理能力を育むための取組を行う。そのための具体的な内容として、世代間交流に重点を置いた活動、および、自らのこころやからだを自らの力で護る、セルフケアに重点を置いた活動を実施した。

3. 本年度の活動プログラム

前項の本年度の重点的取組に沿って、表6の活動を実施した。

表6 活動内容

活動プログラムなど	監修	開催日時	参加者(名)
セルフマネージメント・ヨガ	小口江美子	2月24日(水) 17:00 - 18:30 3月3日(水) 17:00 - 18:30	8 10
築地タウンミーティング ー築地六丁目の専門職業人との交流会ー		2月25日(木) 17:00 - 19:30	33
学生が企画するファーストエイド講習会	卯野木 健 四本 竜一	2月27日(土) 13:30 - 17:00	12
4年生に学ぶキャンパスライフの智恵とコツ ーストレスと上手く付き合うためにー	中山 久子	3月12日(金) 14:00 - 16:00	16
プロから学ぶ料理教室 ー職人のこだわりと、料理と真剣に向き合う姿勢を感じるー	新山 雄次	3月13日(土) 8:00 - 15:00	12
学生とつくるセルフケア講座 ー伝統医学に学ぶ「冷え」の相談とケアー	堀 成美	3月20日(土) 13:00 - 16:30	15
聖路加親子キャンププログラム ー世代間交流の体験を通して、学生の成長を促すー	菊田 文夫	3月20日(土) - 22日(月)	21
学生とつくるセルフケア講座 ーワクチンで予防できる病気 地域・家庭でのケアの工夫を学ぶー	堀 成美	3月27日(土) 13:30 - 16:30	28

4. 課題

本年度は、本補助金の交付内定が年度途中であったため、活動プログラムの準備ならびに実施が、2010年1月以降に集中した。この時期は、学部学生の後期試験期間と、春期休暇期間に当たるため、希望する活動プログラムに参加がかなわない学生も多数みられた。そこで、2010年度は、学事暦を考慮した活動プログラムの実施計画を立てるとともに、学部学生に積極的な参加を呼びかける広報活動にも力を注ぎたい。

教育会議

1. 構成員

<司会>菱沼典子

<メンバー>本学専任教職員、客員教授、兼任教授、非常勤講師、臨床教員

<書記>教務課・高橋

2. 役割

本学専任の教職員の他に、非常勤講師、臨床教員が一堂に会し、その年度の本学の活動内容を知って

もらうこと、また、意見交換を行い本学の教育の質の向上を目指す。

3. 活動内容

毎年年度末に1回開催している。2009年度は3月25日(木)15:30~17:00に開催し、

以下の内容で進められた。

- (1) 理事長挨拶
- (2) 学長挨拶
- (3) 理事会・管理運営報告（事務局長）
- (4) 大学の状況報告
- (5) 教育に関する意見交換

4. 課題

非常勤講師や臨床教員に本学の活動を知ってもらうよい機会となっているが、平日の昼間という時間帯もあり、外部講師の出席者が少ない。

また、限られた時間の中で、それぞれの報告に時間がとられるため、十分な意見交換や発言の時間が少ないことが課題である。特定のテーマを設定するなど、会議の持ち方を考える必要がある。

【看護学研究科】

大学院収容定員に対する在籍者数

修士課程

学 年	収容定員	現 員 数
1 年	Ⓢ : 15	25
	Ⓣ : 15	18
2 年	Ⓢ : 15	23
	Ⓣ : 15	18
3 年		7
計	60	91 (151.7%)

博士後期課程

学 年	収容定員	現 員 数
1 年	10	14
2 年	10	13
3 年	4	30 (うち留年者 19)
計	24	57 (237.5%)

大学院入学状況

左欄：一般 右欄：社会人

+○：外国人特別選抜留学生

		入学志願者数									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士 課程	看護学	5	0	9	6	1	0	0	1	15	7
	ウィメンズ	14	0	17	0	+1	0	0	0	32	0
博士後期課程		6	2	6	7	1+2	1	0	0	13+2	10

		入 学 者 数									
		当該大学出身者		他大学出身者		外国の学校卒		その他		計	
修士 課程	看護学	5	0	12	5	0	0	1	2	18	7
	ウィメンズ	9	0	7	0	+1	0	1	0	17+1	0
博士後期課程		4	1	3	3	+2	1	0	0	9	5

修士課程大学（学部）卒業年別入学状況

大学卒業年度		2009年3月		2008年3月		2007年3月		その他*		計		左記のうち 有職者数	
		大学卒		大学卒		以前大学卒		(外国卒等)					
志 願 者数	看護学	4	1	0	1	18	5	2	2	24	9	19	9
	ウィメンズ	24	0	+1	0	6	0	1	0	32	0	6	0
入 学 者数	看護学	4	0	0	0	13	5	2	2	19	7	0	7
	ウィメンズ	12		+1	0	4	0	1	0	18	0	0	0

* その他に大学評価・学位授与機構を含む

修士課程看護教育機関別入学状況

看護教育機関		大 学		短期大学		専門学校		計	
志 願 者数	看護学	14	4	1	1	9	4	24	9
	ウィメンズ	20	0	2	0	1	0	29	0
入 学 者数	看護学	14	4	1	1	3	2	18	7
	ウィメンズ	14	0	2	0	1	0	18	0

研究生等の学生数

研 究 生		計
学部卒以上	左記以外	
0	7	7

※7名全員修士課程修了者

大学院修了者数

修 士 課 程		博士後期課程 (学位授与)	博士後期課程 (単位取得後退学者)
看護学専攻	21 うち社会人7	11 (4)	5
ウィメンズヘルス・ 助産学専攻	16		

() 内は学位授与者のうち単位取得後退学後再入学し学位を受けたもの

大学院科目等履修者受け入れ状況

授業科目	単位数	履修者数	単位取得者数
がん看護学・緩和ケア特論Ⅲ	2	1	1
がん看護学・緩和ケア実習	6	1	1

研究生受け入れ状況

指導教授	研究生数
井部俊子教授	1
田代順子教授	1
及川郁子教授	1
小松浩子教授	1
森 明子教授	1
堀内成子教授	2

大学院受け入れ状況

	修士課程			博士後期課程	研究生
	学内推薦	I期	II期		
募集要項配付期間	2009年 6月～7月	2009年7月～ 2010年2月	2009年7月～ 2010年2月	2009年 7月～10月	2010年 1月～2月
願書受付期間	2009年7月2日 ～7月8日	2009年8月28日 ～9月3日	2010年2月12日 ～2月18日	2009年9月28日 ～10月2日	2010年1月10日 ～2月10日
募集人員	若干名	●：12 ◎：15	●：3名 ◎：若干名	10	—
志願者数（倍率）	●：1 ◎：3	●：22 (5.3倍) 社会人 5 ◎：28 (1.9倍) 社会人 0	●：11 (4.7倍) 社会人 3 ◎：4 社会人 0	12 (1.2倍) うち社会人7	5 (継続2名を 含む)
受験者数（倍率）	●：1 ◎：3	●：22 (2.3倍) 社会人 5 ◎：27 (1.8倍) 社会人 0	●：11 (4.7倍) 社会人 3 ◎：4 社会人 0	12 (1.2倍) うち社会人7	—
合格者数	●：1 ◎：3	●：18 社会人 4 ◎：14 社会人 0	●：9 社会人 3 ◎：3 社会人 0	11 社会人 6	—
補欠者数	0	◎：1名	0名	—	—
入学者数	●：1 ◎：3	●：11 社会人 4 ◎：13 社会人 0	●：4 社会人 3 ◎：3 社会人 0	11 うち社会人6名	5 (継続2名を 含む)

●：看護学専攻 ◎：ウィメンズヘルス・助産学専攻

看護教育会議

1. 構成員

看護系教員全員、聖路加国際病院看護部長・副部長
ならびにナースマネージャー全員

2. 役割・職務

主たる実習病院である聖路加国際病院看護部との
連携を図り、本学の看護教育の質の向上を図る。

3. 活動内容

会議を4月、7月の2回開催した。病院からはメ
ンバー紹介、看護部の方針、新人の採用計画、卒業
生を含めた新人ナースの状況等、大学からは学生数、

カリキュラムの年間計画（実習を含む）、教育プロ
グラムの斬新な試み、実習における学生の状況、研
究センターの活動等について、情報交換を行った。
また実習における課題について、意見交換を行った。

4. 課題

個別の実習科目については、看護部および当該病
棟との事前打ち合わせ、事後の報告反省会を行って
おり、看護教育会議では全体での課題の共有や、看
護教育界、実践現場の新しい情報について相互に提
供しあう場である。しかし、相互に報告に終始しが
ちで、双方のスタッフが集まる貴重な機会を、より
有効に使える工夫を考えたい。

NP 検討会

1. 構成員

＜委員長＞及川郁子

＜委員＞小松浩子、堀内成子、江藤宏美、小野智美、卯野木健

2. 役割・職務

1) 特定領域の高度実践家の育成について検討する。具体的には麻酔看護、小児看護、助産の分野について検討する。

2) 看護界全体の動向を把握する。

本検討会については、これまで年報に記録がないのでその経緯を記す。

理事長命により2007年度に開始し、修士課程での実践者養成プログラム、主にナースプラクティショナーに関する国内外の現状、動向、課題等の情報収集、検討を行った。2008年度は、それぞれの分野で具体案を検討し、NP 連絡会（注）に参加した。各領域での取り組みは以下の通りである。

- ・小児看護領域では2009年度より、修士課程上級実践コースにプライマリケアコースを開講することとし、カリキュラム内容や方法、指導者等を決定した。
- ・成人看護領域では、クリティカルケア CNS コースを2009年度より開講し、麻酔看護師育成のためのカリキュラムの土台作りを行うこととした。
- ・助産領域については、2010年に聖路加国際病院との共同作業で助産所の開設が予定されており、縫合などの処置ができるように教育を進めていくことが確認された。

（注）NP 連絡会は、平成20年度厚生労働科学研究費補助金「専門的な看護を提供できる実践家の育成に向けた体制構築の方策に関する研究（研究代表者大分県立看護科学大学草間朋子）」を基盤として、日本におけるナースプラクティショナーの養成カリキュラムの標準化と制度化に向けた検討を目的とした会である。当時の堀内成子研究科長が研究連名者で、2008年度より参加している。

3. 活動内容

1) 本年度は、昨年度までに各領域の方針が決まっていたため、必要時開催することとし、9月に1回開催した。

2) NP 連絡会（2009年10月1日より日本 NP 協議会と改称）の会議に及川郁子教授が数回出席した。

2009年度の活動は以下のようであった。

- ・日本 NP 協議会への名称変更とそれに伴う組織編成、規約等の整備
- ・NP 教育の標準化、NP の制度化に向けた検討
- ・大分県立看護科学大学院を中心とした特区提案
- ・第29回日本看護科学学会交流会開催や The National Organization of Nurse Practitioner Faculties への学会発表・参加等の企画
- ・厚生労働省「チーム医療の推進に関する検討会」でのヒアリング、要望書の提出

4. 課題

NP 検討会の初期の目的は達成し、今後は研究科委員会で取り扱うものと考ええる。

ただし、現在日本 NP 協議会のホームページに及川教授がメンバーとして記載されているが、本学としての参加方針が明確になっていないことは課題である。本学では小児プライマリーと助産領域については既に教育を開始しており、周麻酔期看護学の開講も研究科委員会で決定し、本学でのカリキュラムを構築中のため、社会の動向を見ながら、参加のあり方を検討する必要がある。

がんプロフェッショナル養成プラン

1. 構成員

＜運営委員＞小松浩子＜評価委員＞山田雅子

＜専任教員＞金森亮子

＜インテンシブコース担当＞矢ヶ崎 香

2. 役割・職務

聖路加看護大学では、大学院修士課程がん看護専門看護師コースにおいて、毎年4～5名の修了生を

輩出してきた。がんプロフェッショナル養成プランによる連携大学および医療施設との教育連携を基盤として、学生の専門性に応じた実務教育の強化を行った。聖路加看護大学、北里大学、慶應義塾大学による〈南関東がん看護教育トライアングル〉による協働を強め、がん看護専門看護師教育の相互交流を強めた。姉妹病院である MD Anderson Cancer Center のがん専門看護師を臨床教授として迎え、国際的視点に立った高度実践能力の拡大を図った。インテンシブコースとして開講したがん化学療法認定看護師コースの学生(30名)に対し、連携大学の腫瘍専門医、放射線治療専門医、がん専門薬剤師等の専門家による特別講義や臨床講義により、総合的な学習が展開できるよう試みた。あわせて昨年度修了した認定看護師のブラッシュアップ研修を新規に行った。また、がん専門看護師認定試験へのステップアップのために、修了生を対象に事例検討会およびコンサルテーション事業を実施した。

3. 活動内容と成果

- 1) MD Anderson Cancer Center とのがん看護交流ワークショップ「Advanced Practice Nurse : Role in Multidisciplinary Care of the Oncology Patient ; Joyce Neumann, RN. MSN, OCNS」を11月に開催した。南関東がん看護教育トライアングル間で連携し、学生が英語による質疑応答等に積極参与する機会とした。
- 2) 海外姉妹校におけるノマディック演習を実現

するために、MD Anderson Cancer Center、タイ・マヒドン大学を来訪し、がん看護教育およびがん医療、研究の動向について討議し、今後研修等で国際教育交流を実施していく準備を行った。

- 3) インテンシブコースとして、CNS コース修了後認定試験を受ける candidates を対象にした事例検討会、CNS が主催するコンサルテーション事業の継続開催と評価を行い、がん看護専門職者の継続教育の強化を図った。
- 4) インテンシブコースとして、がん化学療法認定看護師教育課程の開講、教育コース(600時間、受講者30名)を実施した。教育内容を洗練するために教育会議で評価、改善を図り、また、MD Anderson Cancer Center のがん専門看護師 Joyce Neumann より、認定看護師教育等についてコンサルテーションを受けて、十分な教育環境を提供するよう努めた。
- 5) 南関東がん看護教育トライアングル事業により、専門看護師教育課程および認定看護師教育課程における Web-based Learning の開発(緩和ケア、症状コントロールなど)と実施(本学の看護ネット上にコンテンツを集積・発信し、関東圏におけるがん看護の質向上をめざしており、コンテンツを検討した)、あわせて、がん看護トライアングルと対がん協会との共同事業による「子宮頸がん予防・早期発見のための啓発教育」事業を推進した。

看護実践開発研究センター

運営委員会

1. 運営委員会

- ＜センター長＞山田雅子
- ＜研究科長＞菱沼典子
- ＜看護ケア研究部門長＞亀井智子
- ＜教育研究部門長＞森明子
- ＜国際看護研究部門長＞田代順子
- ＜政策研究部門長＞山田雅子
- ＜継続教育部門長＞松谷美和子
- ＜研究センター専任研究員＞小口江美子、吉田千文、矢ヶ崎香、細川恵子、實崎美奈
- ＜研究支援室係長＞高木裕也
- ＜オブザーバー＞山口喜義事務局長

2. 役割・職務

看護実践開発研究センター運営委員会規定第3条に基づき、センター運営の基本方針に関すること、事業計画に関することなど、センター運営に関して審議した。

3. 活動内容

11回の運営委員会を開催し、主としてセンターの組織改変について、センター事業の推進について審議した。主な議題の詳細を表6に示した。

また研究支援の対象となった、文部科学省及び厚生労働省の科学研究費による研究一覧を資料として添付した(表7)。表8、9には、客員研究員及び博士研究員とその研究活動の一覧を示した。

4. 課題

今年度は、研究センター組織の見直しに取り組んだ。見直しのきっかけは、昨年度、継続教育を拡大し、予算的にも大きな事業となってきたが、センターのそもそもの目的である市民とのパートナーシップに基づく新しい看護の創生について見えづらくなってきた、また、5つの部門と6つのはたらきについて、系統だった説明がしにくいといった意見が研究員から寄せられたことにある。教職員に対するアンケートなどを通して、1年間の議論を経て、3月末にて2010年度からの組織の骨格が定まってきたところである。

新しい構成は、「PCC 実践開発」「研究活動支援」「キャリア開発支援」の3つの部門を立て、WHO コラボレーティングセンターの機能との連携を強化し、また、センターでの様々な情報を集約し市民向けも含めて発信していくための機能を「情報集約発信担当」として位置づけた。2010年度以降、組織図に従った機能の整理、運営委員会構成員の検討などを行い、組織再編の目的を実現したいと考えている。

表6 看護実践開発研究センター運営委員会各回の主な議題

回数	開催日	議題
第1回	4月14日	新部門長挨拶 客員研究員・博士研究員の承認 2009年度の目標について 認定看護師教育課程訪問看護コースの聴講について 学生の実習や研究受け入れに関する申請書について
第2回	5月12日	センターにおける研究機能の強化について 看護実践開発研究センター事業運営細則の改定について 客員研究員・博士研究員の承認 学生の実習や研究受け入れに関する申請について
第3回	6月9日	センターにおける研究機能の強化について 認定看護師管理者ファーストレベル実施細則の改定について 客員研究員の承認 新規事業申請について

第4回	7月14日	センターの部門再編について 研究事業の内容分析の経過について センターホームページの更新案について 認定看護管理者ファーストレベル実施細則の改正について 客員研究員の承認
第5回	9月8日	センターの部門再編について センター事業2010年度事業申請について センター事業について（「研究センター利用のしおり」の見直し） 客員研究員の勝因 センター専任研究員の公募について
第6回	10月13日	「研究センター利用のしおり」修正案の検討 センター専任研究員の公募について センターの組織改変について 「国際保健コンソーシアム」について ナーススキルアップ「解釈的現象学」講座中止について 2010年度「るかなび」の運営について 博士研究員の承認
第7回	11月24日	2010年度センター事業・聖路加テルモ共同研究事業「事業計画書」について 2010年度センター事業・聖路加テルモ共同研究事業予算（案）について 「国際保健コンソーシアム」について
第8回	12月8日	2010年度センター事業・聖路加テルモ共同研究事業予算（案）について 認定看護師教育課程規則改正（案）及び細則（案）について センター組織改変について センター専任研究員2010年度の人事について
第9回	1月12日	センター長及び専任研究員の任期満了について 部門長の任期満了について 博士研究員のアルバイト時給決定について 2011年度認定看護師教育課程の入試日程案について 認定看護師教育課程の今後について センター組織について
第10回	2月16日	2010年度センター専任研究員の人事について センター組織図について
第11回	3月9日	認定看護管理者講習関連規則改正について センター組織について ホームページ検討会規則・細則（案）について 2010年度専任研究員の部屋割りについて 2010年度センター事業「事業計画書」（追加）について

表7 研究支援の対象となった専任・兼任研究員および研究テーマ一覧

部門	氏名	研究テーマ	補助金名
看護ケア研究	有森 直子	女性のリプロダクション健康課題の意思決定支援教育コンソーシアムとプログラム検証	文部科学省科研費
	飯岡由紀子	女性生殖器系がんサバイバーのためのテーラーメイドケアの開発と評価	文部科学省科研費
	市川和可子	がん体験者が伴走する Web 版乳がん患者サポートグループの開発	文部科学省科研費
	卯野木 健	気管挿管・人口呼吸器使用患者における簡便なせん妄評価法の信頼性・妥当性の検討	文部科学省科研費
	江藤 宏美	乳幼児の睡眠分析システム情報共有プラットフォームの構築 乳児睡眠のホームモニタリングを可能にする自動映像処理システムの開発	文部科学省科研費
	及川 郁子	子どものヘルスプロモーション促進への基礎教育における外来看護実習と外来看護の構築	文部科学省科研費
	大久保暢子	慢性期脳血管障害患者の寝たきりを防ぐ背面開放座位ケアプログラムの開発	文部科学省科研費

看護 ケア 研究	大熊 恵子	病棟看護師が認識している統合失調症患者への退院支援の困難さの分析	文部科学省科研費
	大森 純子	前期高齢女性の近隣他者との交流関係を活用した主体的健康増進プログラムの開発	文部科学省科研費
	小野 智美	日帰り手術に向けての幼児の自律性を支援する看護介入プログラムについての効果研究	文部科学省科研費
	梶井 文子	認知症高齢者の学際的チームアプローチに関するケアの質評価システムの開発	文部科学省科研費
	* 亀井 智子	急増する在宅慢性呼吸不全患者の入院を予防するテレナーシングの日本への実践的導入	文部科学省科研費
	小松 浩子	患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証 遺伝性乳がんの予防・早期発見、管理をめざす統合的ケアプラットフォーム	文部科学省科研費
	佐居 由美	安楽ケア実践力を育む看護基礎教育プログラムの構築	文部科学省科研費
	佐竹 澄子	寝たきり患者の副交感神経優位を導く聴覚刺激	文部科学省科研費
	○ 寛崎 美奈	不本意に治療を中断する不妊症患者夫婦の要因分析：治療開始から1年後までの追跡調査	文部科学省科研費
	瀬戸屋 希	精神科看護における家族ケアリストの開発に関する研究	文部科学省科研費
	外崎 明子	がんサバイバーの身体活力回復プログラムの構築と評価研究	文部科学省科研費
	長松 康子	アスベスト関連相談に関する保健師向けガイドラインの構築と評価	文部科学省科研費
	堀内 成子	貴重児妊娠の不安を軽減するための就寝中胎動ホームモニタリングの実用化開発 ローリスク妊産婦に対する過剰防衛医療の実態と回避方略	文部科学省科研費
	* 森 明子	排卵誘発剤を使用する女性が安楽に安心して過ごすためのセルフケア支援モデルの効果	文部科学省科研費
○ 矢ヶ崎 香	がん医療における EBN と臨床実践の gap と波及モデルの開発	文部科学省科研費	
教育 研究	麻原きよみ	地域看護における体系的倫理教育ラダーの開発と評価	文部科学省科研費
	奥 裕美	夜勤から始める新人看護師オリエンテーションプログラムの開発とその評価	文部科学省科研費
	萱間 真美	看護学の知識体系を構築するための質的研究方法を用いた学位論文指導プログラムの作成	文部科学省科研費
	深谷 計子	日米の看護師国家試験問題のテキスト理解と語彙：使用言語の難易度の妥当性	文部科学省科研費
	中山 和弘	インターネット情報に翻弄される患者、家族を支援する看護職のための e ラーニング開発	文部科学省科研費
	菱沼 典子	少子化社会の学生の特性に合わせた看護学導入プログラムの開発	文部科学省科研費
	* 松谷美和子	看護学士号をもつ新人看護師に求められる臨床実践能力開発のための学習モデルの研究	文部科学省科研費
	柳井 晴夫	臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験(CBT)の開発的研究	文部科学省科研費
国 看護 際 研究	* 田代 順子	看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基礎学習支援の開発と評価	文部科学省科研費

政策研究	井部 俊子	サービスマネジメントをフレームワークとした看護管理学の体系化に関する研究	文部科学省科研費
	梶井 文子	高齢者の経口摂取の維持ならびに栄養ケア・マネジメントの活用に関する研究	厚生労働科研費
	* 亀井 智子	在宅医療への遠隔医療実施手順の策定	厚生労働科研費
	萱間 真美	精神保健医療福祉体系の改革に関する研究 精神障害者の退院促進と地域生活のための多職種によるサービス提供のあり方とその効果に関する研究	厚生労働科研費
	鶴若 麻理	アジアの高齢者の終末期医療をめぐる事前指示に関する国際比較研究	文部科学省科研費
	中山 和弘	患者・家族・国民の視点に立った適切ながん情報提供サービスのあり方に関する研究	厚生労働科研費

注1) ○は専任研究員

注2) *は部門長

表8 客員研究員および研究テーマ一覧

部門	氏名	研究テーマ	共同研究者	所属
看護ケア部門	石井 慶子	周産期の死別を体験した家族へのサポート	堀内 成子	お空の天使パパ&ママの会 聖路加看護大学ペリネイタル・ロス研究会
	糸井 和佳	世代間交流、介護予防、リハビリテーション	亀井 智子 梶井 文子	横浜市立大学医学部看護学科地域看護学
	井ノ下 心	患者と医療者がわかりあえるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性	小松 浩子	東京オンコロジーナーシング研究会
	太田 尚子	ペリネイタル・ロスのケアに関するセカンドレベル教育プログラムの開発と評価	堀内 成子	静岡県立大学
	尾形 美奈子	リンパ浮腫ケアステーション	小松 浩子	学校法人後藤学園附属 リンパ浮腫研究所
	沖 恵理子	リンパ浮腫ケアステーション	小松 浩子	学校法人後藤学園附属 リンパ浮腫研究所
	片岡 光	患者と医療者がわかりあえるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性	小松 浩子	東京オンコロジーナーシング研究会
	片桐 麻州美	周産期病棟におけるセルフマネージングチーム制の評価	堀内 成子	社会保険中央総合病院
	小林 紀子	母乳育児と睡眠の関係	永森久美子	小林紀子助産院
	佐藤 佳代子	リンパ浮腫ケアステーション	小松 浩子	学校法人後藤学園附属 リンパ浮腫研究所
	杉本 知子	転倒予防実践講座の効果の検討	亀井 智子	神奈川県立保健福祉大学
	田中 明恵	リンパ浮腫ケアステーション	小松 浩子	学校法人後藤学園附属 リンパ浮腫研究所
	波多江 優	患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証	小松 浩子	東京オンコロジーナーシング協会
	堀内 祥子	周産期の死別を体験した家族へのサポート	堀内 成子	東京フェミニストセラピー・センター
	本田 晶子	患者と医療者が分かり合えるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性検証	小松 浩子	東京オンコロジーナーシング協会
	本井 多希	患者と医療者がわかりあえるがんコミュニケーション促進モデルの開発と有用性	小松 浩子	東京オンコロジーナーシング研究会

看護ケア部門	内田 千佳子	がん患者の在宅移行に向けた看護体制・教育プログラムの構築	山田 雅子	在宅ホスピス協会
	大久保菜穂子	市民との協働健康支援ボランティア教育プログラムの開発	山田 雅子	日本伝統医療科学大学院大学 統合医療研究科
	霜田 美奈	“るかなび”における市民ボランティアの役割創造	菱沼 典子 るかなび 共同研究者	NPO 法人市民社会創造ファンド
	廣岡 佳代	がん患者の在宅移行に向けた看護体制・教育プログラムの構築	山田 雅子	日本対がん協会
政 策 研究部門	福田 裕子	訪問看護事業所の機能集約及び基盤強化促進に関する調査研究	山田 雅子	あおぞら診療所新松戸

表9 博士研究員および研究テーマ一覧

部門	氏名	研究テーマ	共同研究者
看護ケア 研究部門	五十嵐 ゆかり	在住外国人女性に対する出産ケアの向上	堀内 成子
国際看護 研究部門	成瀬 和子	看護プロフェッショナルに向けた遠隔臨地実習のウェブ基盤学習支援の開発	田代 順子

継続教育部門

1. 構成員

<部門長>松谷美和子

<事務>平良智子、福田昌

<コース責任者（下線）・*主任教員>

- 1) 定看護管理者教育課程セカンドレベル：
井部俊子、吉田千文
- 2) 不妊症看護認定看護師教育課程：森明子*、
實崎美奈
- 3) がん化学療法認定看護師教育課程：小松浩子、
矢ヶ崎香*、細川恵子
- 4) 訪問看護認定看護師教育課程：山田雅子、
竹森志穂*、沼田美幸

2. 役割・職務

当該組織は、「聖路加看護大学看護実践開発研究セ

ンター規程」第2条に基づいて設置され、同第8条②に基づき、看護職の継続教育に関する開発研究事業を行う。

3. 活動内容

本年度は、10コースの看護職のスキルアップならびにコンサルテーション事業、および上記1)～4)の認定看護管理者教育課程および認定看護師教育課程を開講した(表10、表11参照)。また、2008年度より学校教育法第83条および第105条による履修証明書の発行が開始された。各講座については受講生の満足度が高い。実施内容については、スキルアップ講座受講生が本学大学院に合格していること、当該認定看護師教育課程修了生のうち、74名が認定看護師認定審査(日本看護協会認定資格)を受験し、73名が合格であったことから、その充実度が実証された。

4. 課題

看護専門職者としての継続教育支援および大学院
入学希望者支援のためのニーズの発掘、および受

講者の獲得のための広報活動が次年度以降の課題
である。

表10 2009年度 継続教育部門活動実績－スキルアップ講座・コンサルテーション

スキルアップ講座・コンサルテーション	開催数	受講者数	修了者数
英文献を読もう！パートⅠ－基礎編	2コース（10回）/年	27	－
英文献を読もう！パートⅡ－構文理解強化コース	2コース（10回）/年	13	－
語り合おう！看護マネジメント－看護管理者のための ‘サポートグループ’	6回/年	70	－
文献検索 準備体操	3回/年	27	－
退院調整看護師養成プログラムと活動支援	1コース（5回）/年	43	39
がん看護 事例検討会	9回/年	75	－
精神看護 事例検討会	4回/年	111	－
看護管理コンサルテーション	随時（予約制）	0	－
緩和ケアコンサルテーション	随時（予約制）	2	－
在宅ケアコンサルテーション	随時（予約制）	0	－
合 計		368	

表11 2009年度 継続教育部門活動実績－認定看護管理者教育課程・認定看護師教育課程

教育課程	開講期間	受験者数	合格者数	受講者数	修了者数
(認定看護管理者) セカンドレベル	8/3～9/25	32	31	29	29
(認定看護師) 不妊症看護	6/1～2/28	18	16	16	16
がん化学療法看護	6/1～2/28	54	30	30	30
訪問看護	6/1～2/28	28	22	20	17
合 計					

政策研究部門

1. 構成員

<部門長>山田雅子

2. 役割・職務

政策研究部門は、看護実践開発研究センター規定
第8条に基づき、質の高い看護サービスを提供する
ためのヘルスケアシステム構築に関する事業を推進

することを役割とする。

3. 活動内容

政策研究部門として申請のあった事業の一覧を表
12に示す。

4. 課題

学内における研究成果の共有と、学外に向けた情
報発信が今後の課題である。

表12 政策研究部門として実施した事業一覧

	主任研究者	研究テーマ
1	吉田千文	小規模訪問看護ステーションの協働による経営課題解決への取り組み
2	梶井文子	認知症高齢者の学際的チームアプローチに関するケアの質評価システムの開発
3	鶴若麻理	アジア地域におけるリビングウィルに関する可能性と課題
4	及川郁子	障害児の地域生活への移行を促進するための調査研究事業

国際看護研究部門（プライマリーヘルスケア
WHO 看護開発協力センター）

1. 構成員

<部門長> 田代順子

<委員> 長松康子、眞鍋裕紀子、小黒通子、堀成美

2. 役割・職務

1) プライマリヘルスケア看護開発協力センターの事務局として、年間のセンターでの研究業績を収集・選択し、WHO 本部と WPRO へ報告

する。センター再委嘱申請業務等を担当する。

2) WHO C.C.で組織する“Global Network(GN)”での総会参加や交流を促進する。

3) 国際保健に貢献する看護における国際協力研究を推進する。

4) 国内及び海外での国際保健に貢献する広報活動を推進する。

3. 活動内容

1) Annual report in 2008を所定の形式で Web 報告をし(大学年報2008参照)、2009年の作成中。

2) 6月30日ダーバン、KwaZule Natal 大学での開催の総会参加

3) 2010年1月28日(木) WHO Collaborating Center 委嘱申請準備のための情報収集目的で中国・山東大学(Shandong U) Dr. Amy Yuli Zang が来訪、本センター活動情報を提供した。

4) 国際保健医療研究委託費20(指)5(公)「国際保健人材育成のための研修制度、カリキュラム、教材研究」の「大学院修士課程の『国際看護学・助産学』のカリキュラム、教材開発研究」を進め、研究成果を報告した。

4. 課題

1) 2010年で20周年を迎える WHO 看護開発協力センターであるが、委嘱を受けている大学で行われている研究(PCC)の業績の系統的把握の方法が未確立である。

2) 総会出席、GNに関わる旅費等の確保が不安定である。

3) 運営会議委員が研究を担当することにおいて限界がある。

4) WHO 看護開発協力センターの Web 管理・更新上、人的・経済的に課題がある。

表13 年間発表業績

日時	場所	会議名	題名	発表者
6月4日	ダーバン	Post-ICN Cof.	Nursing Education to Achieve the Global Health Goals: Global Nursing Perspectives	田代順子
8月6日	仙台	第24回日本国際保健医療学会学術大会	Education and Competencies for International Collaborators in Nursing and Midwifery	田代順子
9月20日	神戸	第1回世界看護科学学会	Development Needs of Master's Programs in Global Health Nursing and Midwifery in Japan	田代順子
9月22日	ソウル	Korea Sigma Theta Tau International Conference	Current Nursing Values and Theory Global-International Health Nursing: A New Specialty in Japan	田代順子

研究業績

国際医療協力研究委託費 20指5分担 大学院
修士課程の「国際助産学・看護学」カリキュラム

教材開発研究により最終成果として『国際看護学
のサブ領域とコア専門・基礎科目試案（下図）』を
作成した。

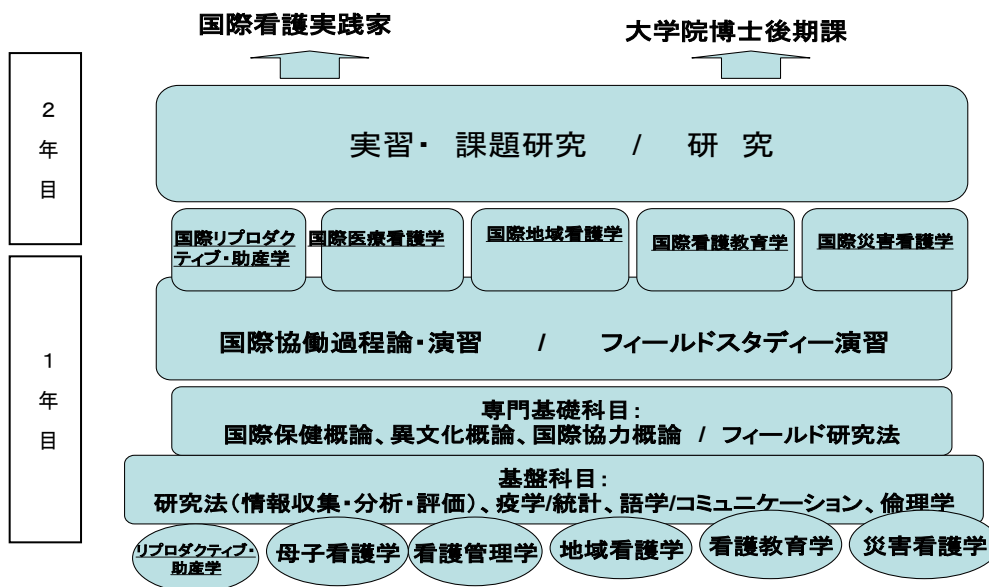


図 国際看護学のサブ領域とコア専門・基礎科目試案

教育研究部門

1. 構成員

＜部門長＞森明子

＜事業主＞菱沼典子（るかなび：聖路加健康ナビスポット）、大久保菜穂子（健康支援ボランティア講座）、小口江美子（新健康カレッジ・聖路加市民アカデミー・あなたに見合う運動実践アドバイス・ストレスマネジメントヨーガクラス）、吉田千文（中央区民カレッジまなびのコース・シニアコース）、宮里和子・堀内成子（朗読の会）

2. 役割

1) 教育研究部門は、市民が自らの健康とその回復・維持増進について学ぶためのチャンスやリ

ソースの提供を通じ、人々の健康づくりにおける市民と専門職との協働を促進するモデルの開発を探究する

2) 研究センター基幹事業としての「るかなび」を管轄し、中央区との連携事業、聖路加・テルモ共同研究事業の主要事業を担う

3. 活動内容（表14, 15, 16参照）

1) 各事業は、年度計画のもとに計画的に実施している。開催回数、利用者数は資料参照。

2) 本年度より「るかなび」は研究センター基幹事業となった。来訪者数が増え、地域への定着が進んだ。また、血圧・体脂肪・骨密度の測定値の利用者への説明をめざし、勉強会を開催するなど市民ボランティアの活動が拡大した。中央区との連携事業は好評で次年度も継続される。

4. 課題

1) 事業利用者は比較的平均年齢が高く、そのニーズからテーマも中高年者向けになる傾向がある。子ども、若者、若い女性の参加・利用者

層も増やしたい

2) 「るかなび」におけるコーディネーターの確保、骨密度測定に関する対価の考え方が難しい。

表14 教育研究部門で実施した事業

事業名	事業主	構造要因		プロセス要因		アウトカム	
		会場場所	事業主以外の学内従事者	学外従事者	プログラム	開催回数	年間利用者数
るかなび	菱沼典子	2号館1階	専任・兼任研究員、大学院生・学部生ボランティア	コーディネーター、市民ボランティア	血圧・体脂肪・骨密度の測定、健康相談、健康・医療情報検索、闘病記文庫、ランチタイム講座	210日開室	1,466
健康支援ボランティア講座	大久保菜穂子	2号館	専任・兼任研究員、司書	客員研究員、コーディネーター	健康支援ボランティアの育成	4回	33
新健康カレッジ	小口江美子	2号館	大学院生・学部生—	テルモ株式会社担当者	中高年向け健康講座	4回	183
聖路加市民アカデミー	小口江美子	1号館ミセスアリスセントジョンメモリアルホール	専任研究員	テルモ株式会社担当者	テーマ「新健康・良い環境の中での生き方」での講演	1回	181
あなたに見合う運動実践アドバイス	小口江美子	2号館	—	—	幅広い健康状態に対応する運動実践のアドバイス	11回	34
ストレスマネジメントヨーガクラス	小口江美子	2号館	健康管理室、学生部	—	ハタヨーガの技法を通じリラックスをはかる	12回	119
中央区民カレッジ まなびのコース	山田雅子	2号館	専任・兼任研究員、研究支援室担当者、学生アルバイト	中央区役所職員、客員研究員	前期：からだを知る講座 後期：命の営みを知る講座	5回	50
中央区民カレッジ シニアコース	山田雅子	中央区社会教育会館、大学本館・2号館、聖路加国際病院	専任・兼任研究員、研究支援室担当者、学生アルバイト	中央区役所職員	医療や看護を知る講座	10回	24
朗読の会	宮里和子／堀内成子	2号館	堀内成子	客員研究員	文学作品の朗読を通じ、健康・いのちについて語る	10回	102

表15 「るかなび」利用者数（計測および健康相談：用紙記入者数）

月	来訪者数	累計	活動日数	1日あたりの来訪者数
4	148	148	21	7.05
5	161	309	18	8.94
6	*1 206	515	22	9.36
7	162	677	22	7.36
9	147	824	19	7.74
10	144	968	21	6.86
11	141	1,109	*2 20	7.05
12	80	1,189	17	4.71
1	77	1,266	14	5.50
2	103	1,369	19	5.42
3	97	1,466	17	5.71

年間来訪者数：1,466人 活動日数：210日 1日平均来訪者数：7.0人

*1 6月（～7月）学部1年生の課題のための利用あり。

*2 11月7日（土）白楊祭の1日を含む。

表16 「るかなび」活動登録者数（平成21年度末）

メンバー	内訳	人数
ボランティア	市民ボランティア	45
	専門職ボランティア	39
	小計	84
大学スタッフ	専任研究員	7
	兼任研究員	22
	司書	1
	コーディネーター	3
	小計	33
	計	117

看護ケア部門

1. 構成員

<部門長> 亀井智子

<看護ケア部門事業主> 片岡弥恵子(赤ちゃんがやってくる)、堀内成子(ルカ子母乳育児相談・天子の保護者ルカの会・グリーンカウンセリング)、森明子(ルカ子ウイメンズヘルスカフェ)、小松浩子(乳がん女性のためのサポートプログラム・リンパ浮腫ケアステーション)、及川郁子(子どもの健康、知ろう、考えよう)、梶井文子(栄養

相談と健康心理カウンセリング)、亀井智子(多世代交流型デイプログラム聖路加和みの会・高齢者のための転倒骨折予防実践講座・出張介護講座)

2. 役割

1) 看護ケア部門は、看護実践開発研究センターの一部門として、新たな看護データベースモデルの研究開発、および看護モデルの実践提供を通じて、市民主導型看護ケア(PCC)のあり方を探求する。

2) 専任・兼任研究員が事業主となり様々な世代

にある人々の様々な健康課題に焦点をあて、ナースクリニックの場において、広く市民に看護モデルの実践を提供するとともに、研究成果を蓄積し、根拠のある看護を開発・創生する。

- 3) 各事業主が学部生、大学院生、専門職、他大学の教員等を対象として、看護の実践開発を理解する等の目的で教育の機会、および場として各事業を提供する。

3. 活動内容

1) 事業の推進

看護ケア部門の各事業は、年度計画のもとに計画的に実施している。

開催回数、参加者数は表17の通り、年間2,247名の市民を対象に事業が展開された。

2) 看護ケア部門ミーティング

本部門に属する研究事業全体の内容や課題、

および様々な対象者に安全に事業を展開するための方法について話し合う部門ミーティングを2回開催した。

3) Quality control

本部門に属する事業の質を維持・向上するために「構造－実践過程－成果」の各要因から事業の質評価を行っている。また、安全に看護実践を提供するために、上記ミーティングにおいてインシデントのRCA(Root Cause Analysis)分析を行い、構造と実践経過に焦点をあてた安全対策指針を作成した。

4. 課題

研究者と市民との協働により、看護実践を研究開発する上で、最も重要な要素はコミュニケーションと多様な安全管理であると認識している。ミーティングを通して事業間の情報交換等を継続したい。

表17 看護ケア部門で実施した事業

事業名	事業主	構造要因	プロセス要因			アウトカム	
		会場場所	事業主以外の学内従事者	学外従事者	プログラム	開催回数	年間参加者数
赤ちゃんがやってくる	片岡	交流ラウンジ	院生-演習として履修 学部生-性教育ゼミ履修者 大学院生・学部生ボランティア	助産所助産師	父母と子どもが参加して新生児を家族に迎えるためのクラスを提供	6	188 /63組
ルカ子母乳育児相談	堀内	相談室、家庭訪問	学部生 - 看護研究II	客員研究員	授乳中の母子の育児相談(授乳、眠り、離乳食など)	89	240
ルカ子ウイメンズヘルスカフェ	森	ぼるかりーム	教員 認定看護師教育課程(不妊症看護コース)研修生 演習として2回を企画・運営	子宮筋腫・子宮内膜症体験者の会 不育症友の会等自助グループ	不妊、筋腫、内膜症、出生前診断など、テーマを決めて学習と話し合い	6	53
天使の保護者ルカの会	堀内	交流ラウンジ ミーティングルーム	院生一研究として参加 学部生一家族発達II、卒業研究 他の大学、看護職の研修	客員研究生 日本手芸普及協会 カラーセラピー	周産期喪失を経験した家族のお話会 (小集団)	8	96
グリーンファウンセリング	堀内	ミーティングルーム		客員研究員	周産期喪失を経験した家族個人のカウンセリング	6	5組

乳がん女性のためのサポートプログラム	小松	交流ラウンジ ぼるかルーム 本館	学部生 大学院生ボランティア	聖路加国際病院 プレストセンター・オンコロジーセンター 看護師 プレストクリニック 築地看護師	・10人1グループで体験を話し合う ・再発の人のグループでは深く話し合う ・先輩患者から他の患者へのピアサポート ボランティアをプレストクリニック 築地で月2回開催	9	365
リンパ浮腫ケアステーション	小松	相談室		後藤学園 聖路加病院プレストセンター	アセスメントとリンパ浮腫マッサージ	53	197
子どもの健康、知ろう、考えよう	及川	交流ラウンジ または1号館	学部生	各テーマの専門家(講師) 企画者として中央区の保育園看護師・保健師・病院看護師・養護教諭など	子どもの健康のテーマについて、講義により学習の機会と、参加者の質問や話し合いの時間を持つ	4	140
栄養相談と健康心理カウンセリング	梶井	1号館研究室、2号館相談室等	-	心理カウンセラー	カウンセリング	3	3
聖路加和みの会	亀井	ぼるかルーム 大学芝生 地域散策	院生 ボランティア 学部生-生涯発達看護論Ⅱ実習、老年看護ゼミ演習 看護研究Ⅱ ボランティア	地域ボランティア 区書道連盟 NPO アロマセラピーサポートセンター キルトリーダー ス東京	都市部在住の小中学生と高齢者の世代間交流を促進し、高齢者にとっては子ども世代への知恵と文化の伝承、子どもにとっては高齢者理解を促進し、互恵的ニーズを充足する看護ケア	40	879
転倒骨折予防実践講座	亀井	1号館アーツ	学生ボランティア	桜美林大学 浦和大学 国立長寿医療センター研究所 神奈川県立保健福祉大学 横浜市立大学 看護師 るかなびヘルスボランティア	6回で1コース 1回目:アセスメント、問診、転倒歴、転倒リスク、QOL、骨密度、開眼片足立ち時間、10メートル歩行速度などの測定、運動 2~4回目:健康教育+運動 5回目:12週後 6回目:53週後	12	36
出張介護講座	亀井	地域の指定場所へ出向く	-	中央区シニアセンター	依頼者と相談の上決定	1	45

PHC WHO 看護開発協力センター

1. 構成員

＜センター長＞ 菱沼典子

＜委員＞国際研究部門運営会議議長・田代順子、
長松康子、小黒通子、眞鍋裕紀子、堀
成美

2. センターの目的

- 1) ミレニアム開発目標達成と少子高齢化社会に
貢献する看護実践モデルを開発する。
- 2) プライマリーヘルスケアにおける看護のリー
ダーシップを推進する。
- 3) 個人・家族・地域のエンパワーメントを目指
し、エビデンスを用いて、実践の開発と研究を
行う。
- 4) プライマリーヘルスケアにおける看護・助産
についての教育と実践向上するため、研究とシ
ステム改革を支援する。

3. 活動内容

- 1)、3) 2008年度研究活動の WHO WPRO への
報告：2008年度本看護実践開発センターでの市
民主導型ケア開発研究を WPRO、WHO 本部へ
年次報告書提出した。
- 3) 国際協力研究
2009年度：国際医療協力研究委託費研究 20

指定5の「国際保健人材育成のための研究制度、
カリキュラム、教材に関する研究」の分担研
究「大学院修士課程の国際助産学・看護学」の
カリキュラム開発を進め、シラバス試案を作成
した。

→ 国際看護・助産学コンソーシアムを2008年
11月に結成し、2009年8月29日ワークショ
ップ「国際災害看護学」を開催し、その他、
メールでのWHOからの情報を共有してい
る。

- 4) 看護助産強化への教育を通しての貢献（国際
コースの開始）
インドネシア・イスラム大学からの博士課程
院生の受け入れ 現在、博士2年1名、1年2
名
タンザニア・ウィメンズヘルス助産学修士1
年1名受け入れ
- 5) 南アフリカ開催の「グローバルネットワーク」
総会に田代議長が参加した。

4. 課題

- 1) 市民主導型看護実践研究の成果集約機能が未
確立であること。
- 2) 看護助産を強化し、PHC を通じて国際保健
向上を強化するための基盤形成としての国際
保健看護・助産学の確立を目指しているが、そ
の枠組みと体制が未整備

表 18 WHO NEWS 一覧:WHO 看護開発センターWeb 上及び「看護」(日本看護協会出版会)
で国内広報中

	執筆者		
2010年3月	田代 順子	「グローバルネットワークの今」	第62巻第3号
2009年11月	眞鍋裕紀子	第2回国際看護・助産学コンソーシアム	第61巻第13号
2009年9月	長松 康子	WHO 神戸により研究協力強化会議	第61巻第11号
2009年7月	田代 順子	西太平洋と南西アジア地区で提唱する保健政策の枠組み “People-Centered Health Care”『人々が中心のヘルスケア』	第61巻第9号
2009年5月	平野 優子	国際保健コンソーシアムの設立と本学の活動	第61巻第6号

るかなび運営会議

1. 構成員

＜委員長＞菱沼典子

＜委員＞山田雅子、森明子、小口江美子、吉田千文、佐藤晋巨（図書館）、高木裕也（研究支援室）、石川道子（コーディネータ）、川口千鶴（コーディネータ）、霜田美奈（コーディネータ）

委員会ではボランティアの参加を推奨しており、以下のメンバーの参加があった。

高橋恵子、佐藤直子、真部昌子、印東桂子

2. 役割・職務

- 1) るかなびの運営に必要な企画・手順等を検討し、問題があれば改善策を講ずる。
- 2) ボランティアによる運営の活性化を図り、市民主導型健康生成に向けた活動を推進する。
- 3) 研究センターの基幹事業として機能するよう、活動を推進する。

3. 活動内容

- 1) 運営会議を11回開催し、運営に関する諸事を検討、決定した。
- 2) 登録ボランティアと運営委員会メンバーによる全体会議を7・12・3月の3回開催した。また、登録ボランティアとコーディネータでボランティアミーティングを8回開いた。事例検討会2回、勉強会9回、研修会6回を開催した。
- 3) 相談員として教員が参画するよう年間を通して働きかけ、その結果相談員の不在日数の大幅な減少がはかられた。実践の場・教育の場・研究の場となるよう計画し、学生・研修生の実習を受け入れ、学会で演題発表・講演等を行った。

4. 課題

今年度の活動の中から、研究センターの基幹事業として、また PCC を目指す活動として、次年度はさまざまな変化を計画した。事業主（委員長）をセンター長に変更すること、骨密度の測定を有料化すること、市民ボランティアの活動を広げること（計測値を伝えて相談に乗ること、サロン活動を行うこと等）、ボランティア育成講座を主催する

こと等を予定している上に、コーディネータ全員の交代と重なることになった。これらの計画の成就のために、関わる多くの人々とコミュニケーションをとりながら進める必要がある。

COE 終了以降、聖路加・テルモ共同研究事業として活動を続けてきたが、次次年度以降の活動の継続に向けた計画が課題である。

表19 来訪者数（健康相談用紙記入者のみ）

月	来訪者数	累計	開室日数	1日あたりの来訪者数
4	148	148	21	7.05
5	161	309	18	8.94
6	*1 206	515	22	9.36
7	162	677	22	7.36
9	147	824	19	7.74
10	144	968	21	6.86
11	141	1,109	*2 20	7.05
12	80	1,189	17	4.71
1	77	1,266	14	5.50
2	103	1,369	19	5.42
3	97	1,466	17	5.71

年間来訪者数：1,466人 活動日数：210日

1日平均来訪者数：7.0人

*1 6月（～7月）学部1年生の課題のための利用あり。

*2 11月7日（土）白楊祭の1日を含む。

表20 ランチタイムミニ講座・ミニコンサート参加者数

月	来訪者数	演者・スタッフ	参加総数	アンケート回収数
4	31	3・5	39	27
5	44	3・4	51	15
6	42	2・3	47	31
7	30	3・6	39	19
9	48	20・7	75	43
11	32	2・7	41	17
12	35	13・6	54	26
1	28	1・9	38	24
2	32	2・6	40	24
3	25	2・6	33	21

開催回数：10回 参加総数：457人

来訪者数：347人 演者総数：51人 スタッフ数：59人

表21 「るかなび」活動登録者数（2009年度末）

メンバー	内 訳	人 数
ボランティア	市民ボランティア	45
	専門職ボランティア	39
	小 計	84
大学スタッフ	専任研究員	7
	兼任研究員	22
	司書	1
	コーディネーター	3
	小 計	33
	計	117

表22 ボランティア・教員等の活動状況

	月												計
	4	5	6	7	9	10	11	12	1	2	3		
開室日数	21	18	22	22	19	21	19	17	14	19	17	209	
市民ボランティア活動者数	16	16	16	16	17	16	15	10	9	9	11	151	
市民ボランティア延数	48	40	41	29	34	30	31	29	24	19	20	345	
専門職ボランティア活動者数	10	7	11	13	12	13	13	9	8	13	11	120	
専門職ボランティア延数	29	19	34	40	40	35	30	27	18	30	28	302	
協力教員数	14	16	14	7	9	12	9	5	8	8	5	107	
協力教員延数	20	22	19	13	9	13	9	7	8	8	5	133	
学部生ボランティア登録者							11					11	
学部生ボランティア活動者数							2	1	0	0	1	4	
学部生ボランティア延数							4	2	0	0	1	7	
相談員（専門職V+教員）数	24	23	25	20	21	25	22	14	16	21	16	227	
市民ボランティア半日不在日数	9	6	11	13	8	9	4	3	5	4	4	76	
市民ボランティア全日不在日数	1	1	2	2	3	3	5	6	5	10	6	44	
相談員半日不在日数	4	2	1	1	2	1	2	1	1	0	1	16	
相談員全日不在日数	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	

聖路加・テルモ共同研究事業

1. 構成員と役割

企画、広報、運営：小口江美子（聖路加看護大学教授）

企画、広報：吉川政司（テルモ株式会社マーケティング室担当課長代理）

2. 活動内容

2008年度より社会貢献事業として一般市民向けの健康支援セミナー「聖路加・テルモ新健康カレッジ」を開講し、自分自身の体を理解し上手く健康を管理調整してより良く生きることを目指して、市民に学

びの場を提供している。「新健康」のコンセプトは、「無病息災ではなくても、たとえ持病があっても、上手くそれをコントロールしながら、心身ともにより良く心豊かに生きる」ことを目指す、という本学の日野原重明理事長の提唱によるものである。2009年度は聖路加国際病院などの医師や聖路加看護大学教授による、4回のカレッジセミナーと1回の市民アカデミーの講演を通じて中高年の健康をサポートした。

1) 新健康カレッジセミナー

①5月30日、②7月11日、③11月4日、④12月12日（いずれも土曜日開催14時～15時30分）
「もっと知ろう、自分のカラダ！」全4シリ

ーズ

①身近に起きる高血圧症とその対策：西裕太郎先生(聖路加国際病院循環器内科医長)

②骨粗しょう症の仕組みとその対策について：菱沼典子先生(聖路加看護大学基礎看護学教授)

③インフルエンザについて：古川恵一先生(聖路加国際病院感染症科部長)

④糖尿病や糖尿病予備軍とその対策：門伝昌己先生(聖路加国際病院内分泌代謝科医長)：

参加人数はそれぞれ①36名、②56名、③44名、④47名であった。参加者からは「今後も参加させていただきます」「順序よくお話を進められたので大変良いと思いました」「健康に関わることは、何でも知りたいのでいろいろ教えて下さい」「骨粗鬆症のお話とてもよくわかりました」「最新の情報がわかりやすく、勉強になりました」「今後もぜひ続けていただきたい」「専門家の方々による解りやすい講義はとても理解できて嬉しく思います。今後も貴重なお話を期待しています」「ぜひ続けてほしいと思います」などの感想が寄せられた。

カレッジセミナーは地域住民に定着した様子で、昨年に比べ継続参加者数が増えた。4回参加者は20名、3回参加者は13名、2回参加者は11名で、4回継続参加者にはセミナーに役立つ聖路加グッズが記念品として贈られた。

2) 聖路加市民アカデミー

2009年10月15日(金曜日13時30分～16時)開

催

新健康・良い環境の中での生き方

①「新健康のあり方～環境を整え健やかに生きるとは」：日野原重明先生(聖路加国際病院理事長・同名誉院長・聖路加看護学園理事長)

②「子どもや胎児へのタバコの影響～タバコから子どもたちを守る環境づくり」：加治正行先生(静岡市保健所長)

参加人数は281名であった。毎年恒例の市民アカデミーは、平日にもかかわらず地域住民をはじめ多くの市民の参加を得た。参加者からは「日野原先生のお話から生きる力のパワーをいただきました」「日野原先生の講演はユーモアがあり楽しくお話を聴くことができ、これからの自分の生き方の参考にさせていただきます」「自らを見直す良い機会でした。感謝しています」「喫煙の危険性についてとても分かりやすく拝聴しました」「とても素晴らしいお話でした。タバコがやめられない娘にこの資料を早速見せたいと思います」「もっと若い人たちにもぜひ聞かせたい内容でした」「コンサートはとても癒されて心満ち足りた気分になりました。ありがとうございました」等の感想が寄せられた。

3. 課題

市民アカデミーを土・日に開催し、平日仕事を持つ人も参加できるよう企画する。